

カヌーでゴミ0大作戦 in 水俣川

14 海の豊かさを
守ろう

熊本県立水俣高等学校

研究の背景と目的

熊本県立水俣高等学校は、水俣高校と水俣工業高校が再編統合され、平成24年4月1日に開校した。水俣高等学校のカヌー部はこの再編統合の際に新たに発足した部活動である。カヌー部は発足して間もないが、これまでに全国大会や国体への出場を数度果たし、日々精力的に活動している。発表者らは、部活動の練習で利用している水俣川において、しばしば浮遊している「河川ゴミ」を目撃することがあり、その都度回収してきた。

「河川ゴミ」とは、河川区域内（貯留機能保全区域を含む）にて確認される「散乱ゴミ」および「自然ゴミ」を指す¹⁾。「散乱ゴミ」とは、陸域で発生するごみのうち日常生活や社会・経済活動等の人間活動に由来して発生する「人工ごみ」である¹⁾。また、「自然ゴミ」とは自然界から発生する流木や水草等をさす。

本研究では、水俣川の「河川ゴミ」（「散乱ゴミ」および「自然ゴミ」ともに）を収集し、河川の清掃活動を実施すること、併せて、ゴミの数量および種類を調査することを目的とした。

方法

水俣川（右図の青色で示す）は熊本県南部を流れる二級河川で、22kmの長さである。熊本県水俣市古里が源流で、八代海へ注いでいる。



本研究では、下図の赤色の両矢印で示す、水俣川河口のカヌー部の練習場所の河川、長さ約0.7km・幅約0.1kmの区間を「河川ゴミ」調査の対象とした。

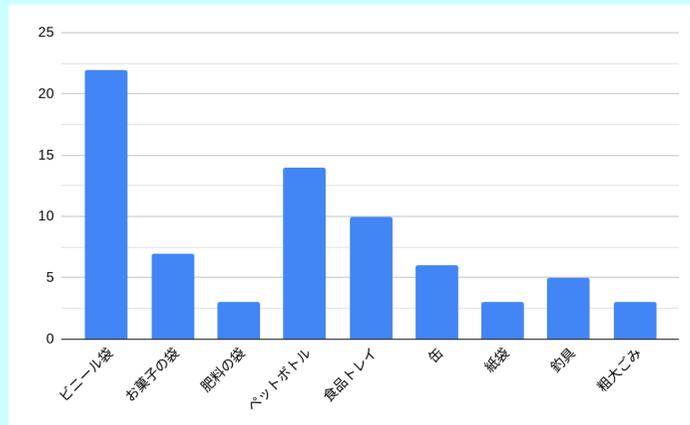


調査期間は2022年5月15日から11月15日の6か月間で週6回・1日平均2時間のカヌー部の練習中に、カヌー部員35人が収集した「河川ゴミ」を調査対象とし、その数量および種類を調査した。対象とする「河川ゴミ」（「散乱ゴミ」および「自然ゴミ」）は部員の安全を考慮し、カヌーに乗船中に容易に回収できる浮遊しているゴミと、カヌー部の艇庫前のカヌー乗船用の階段に漂着したゴミのみとした。



結果および考察

調査期間中に回収したゴミは合計147個であった。下のグラフに主なゴミの種類および数量を示した。期間中に回収したゴミはすべて「散乱ゴミ」であり、「自然ゴミ」の回収は無かった。



回収したゴミの一部

最も多かったゴミは、スーパー等の買い物の際に購入するビニール袋（レジ袋）（14%）で、次に飲料水のペットボトル（9.5%）であった。ペットボトルは中身が残ったままのものも多かった。中身が判明している飲料であれば、中身を廃棄し、リサイクル資源として回収することが可能である。しかしながら、判別不能な液体の場合は、中身を廃棄する際に危険が伴う。ゴミのポイ捨ては論外だが、中身を廃棄せずに捨てた場合は、リサイクル資源として利用出来なくなることも周知する必要があると考えられた。



ビニール袋



中身が残ったままのペットボトル



その他のゴミ

ゴミ全体の中で、プラスチックゴミ（ビニール袋・お菓子の袋・肥料の袋・ペットボトル・食品トレイ・釣具）が占める割合が最も高かった（41.4%）。他の河川での調査においても、回収されるゴミの中で最も多いのはプラスチックゴミであり²⁾、水俣川でも同様の結果であった。「河川ゴミ」は海に流れ着き、最終的には海洋ゴミとなる主要な原因である。世界的にも海洋におけるプラスチックゴミは解決すべき喫緊の課題とされている。今後も水俣川の「河川ゴミ」の回収を継続していくことで、水俣川だけの環境問題と捉えず、世界的なプラスチックゴミの削減の一助となることを目指したい。

今後の展望

水俣高等学校のカヌー部員が、水俣川で練習していることは水俣市民に広く知られている。しかしながら、練習中にカヌー部員がゴミの回収を行っていることは知られておらず、水俣に暮らす人々、特に、小中学生にゴミ問題を考えてもらう契機になるのではないかと考える。今後は、カヌー部が行っているゴミ収集活動に関するポスターを作成し、市内の小中学校に配布・掲示する。また、小中学校への出前授業などを通して水俣川のゴミ問題に関する啓蒙活動を行っていく。また、次年度以降は、「河川ゴミ」の回収だけではなく、河川の水質調査等を加えていき、水俣川の環境を守る活動をカヌー部の継続的な取り組みとしたい。

謝辞：ゴミの収集に協力して下さったカヌー部のみなさまに厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 国土交通省 水管理・国土保全局 河川環境課(2022)ごみのない水辺を目指して ～流域と連携した河川ごみ対策の事例集～
- 環境省 水・大気環境局水環境課 海洋プラスチック汚染対策室 (2021)河川ごみ調査参考資料集